早稲田大学大学院教育学研究科紀要　別冊　17号―1　二〇〇九年九月

『西鶴諸国はなし』巻二の五「夢路の風車」における物語空間についての分析

水上雄亮

はじめに

『西鶴諸国はなし』・巻二の五「夢路の風車」という物語は、森耕一氏によれば「異界の夢のなかで夢をみる、夢の二重構造になっている」という。[1] 物語の主人公である「奉行」は、「山人」の跡を追って飛騨のどこかにあるという「隠れ里」に迷い込む。冬山を分け入ったはずが、その地は春さながらの陽気だった。彼は誘われるように眠りに落ちてしまい、「夢」の中で女商人の亡霊と出会う。隠れ里で起きた殺人事件の真相を告げられた奉行はその事実を当地の「国王」に報告し、事件は解決される。奉行は褒美として「嶋絹」を獲得し、空飛ぶ「風車」に乗って飛騨に帰還する。[2]

つまるところ、「夢の二重構造」とは「二重の異界体験」のことである。本論は森氏の知見に依拠しつつ、二重構造の図式化を通じて物語空間の構造を析出[3]することを目的とする。「世界と異界、さらにその異界」という3つ組の世界が形成する位相構造を明らかにしたい。

なお、本論の背景には「世界の外部とは何か」という形而上学的問題に対する関心がある。おそらくこの物語において、隠れ里は飛騨という世界の「彼岸」に存在する。それらは異質な時空系に属する、別の世界であろう。しかし、「時空の限界を超越した、世界の外部」というのは果たして物語ることが可能なのだろうか。「世界の外部」を語ることで「夢路の風車」という物語が不可避的に抱え込む諸問題も、あわせて考察したい。

1

原理的に、「ある世界から別の世界への超越」という出来事は矛盾を伴う。世界とその外部である異界とを隔てる「境界」は、たとえば国と国を画する「国境線」のようなものではない。むしろそれは、どこまで行っても原理的に到達不可能な「地平線」のような、「世界の限界としての隔て」でなければならない。そうでないなら、「異界」は単なる「異境」にすぎないことになってしまう。異境は奇異ではあ

るだろうが、怪異ではない。

本来的に異界というものはありえない。だからこそ、異界を語る物語は怪異なのだ。それゆえ「決して越えられない境界があり、かつそれが何者かによって越えられる」というのが異界体験の条件であり、そして異界の物語に特有のパラドックスである。

このパラドックスを解消するために（あるいはパラドックスを発生させるために？）、物語には「特権的人物」や「特権的契機」といった要素が導入される。特別な人間や出来事が契機となり、越えられない世界の隔たりが超越され、世界と世界の外部とが短絡される。

「夢路の風車」において特権性を発揮しているのは、「勇敢な奉行」と「怪異能力を備えた姉妹」のセットである。[4] ここで「セット」とするのは、「世界間を超越してしまう奉行」と「それを待ち望んでいた女商人」という関係が見てとれるからだ。奉行にとって隠れ里の発見は偶然でしかないが、女商人にとって彼の到来は待ちに待った好機だった。奉行の到来は、彼女らとの出会いゆえに物語として意義づけられる出来事となった。事後的にみれば、あたかも彼女らが超越を誘引したかのようだ。奉行が超越の作用因であるとするなら、女商人はその目的因のように機能している。

〈迷い人＝部外者〉である奉行というチャンネルを介することではじめて、〈死者＝部外者〉である女商人は真実を告げることができた。論理的には誤謬でしかないが、「あなたと私は異人どうし、それゆえ私たちは仲間である」という一種の合理化が両者の出会いを支えている。

それゆえ、夢は「通信のために利用される単なるメディア」ではない。奉行は「夢を通じて」というよりは、「夢において」女商人と出会った。むしろ彼らの出会いは、「夢」という第三の世界において起きたと考えるべきである。[5] 「飛騨の住人によって、隠れ里において見られた夢」は、その両義性ゆえに飛騨にも隠れ里にも帰属しえない。それは飛騨の世界とはもちろん、隠れ里の世界とさえ一線を画すもうひとつの異界なのだ。

「夢」という世界が新たに生成することで、物語空間に「飛騨／隠れ里／夢」という三界構造が成立する。仮に飛騨を此岸、隠れ里を彼岸とするなら、「夢」は「此岸」でも「彼岸」でもない「彼岸の彼岸」としてある（このような表現が「ありえない」、つまり概念として無意味であることに注意されたい）。

物語の発端において、物語空間[6]には「飛騨の日常世界」が存在するのみであり、日常世界の限界がそのまま物語空間の限界と一致していた。それが奉行の超越によって「飛騨／隠れ里」という世界対（つい）が発生し、ついで奉行と女商人との出会いによって三界構造に発展したのである。もともと「飛騨」と「隠れ里」と「夢」とがあって、それがあるとき結びつけられたのではない。奉行の超越以前には、「隠れ里」などそもそも存在しなかったのである。

2

それでは以下において、物語空間の位相関係について考察を進めたい。本論では便宜上、飛騨の世界を「日常世界」、隠れ里を「異世界Ⅰ」、夢の世界を「異世界Ⅱ」と呼称することにする。まず、奉行が世界間を越境する局面を整理してみると、以下のようになる。

0（奉行の登場、岩穴の発見）
1飛騨　↓　隠れ里　…「四五丁くぐるとおもひしが」
2隠れ里　↓　夢　…「前後もしらずかり寝する」
3夢　↓　隠れ里　…「言葉もつゐに絶て、夢は覚ける」
4隠れ里　↓　飛騨　…「目ふる間に、すみなれし国にかへり」

このうち1と4は「（物理的／超物理的）移動」によって、2と3は「睡眠（もしくは覚醒）」によって世界の超越が生じている。奉行は飛騨の奥山で不審な山人を発見し、彼を尾行したことで隠れ里という異界に迷い込む。これを契機として、それまで唯一日常世界のみが存在していた物語空間が拡張され、世界対が生成する。これを以下のように図式化（図1）する。

図1

W ⟶ AW

W（orld）　…日常世界
A（nother）W（orld）　…異世界Ⅰ

そして、飛騨の気候（冬）とは裏腹に辿り着いた先が春の陽気だったため、奉行は心地よく眠りこんでしまう。その夢の中で、二人の女商人の亡霊から谷鉄に殺された無念を聞かされる。彼は異界に辿りついた矢先に、もう一つの異界に没入してしまう（図2）。

夢から覚めた奉行（3）は死体の捜索に向かう。二人の死体が埋められている場所には「玉柳」が生長しており、人だかりが出来ていた。奉行は女商人殺害の真相を「国王」に報告し、谷鉄の犯罪を露見させる。その功績を認められた奉行は「御ほうび」の「嶋絹」を授与され、「風車」に乗って飛騨の日常に帰還する（4）。これらの運動を単純に合成すれば、以下のようになるだろう（図3）。

だが、この図は単線的であり、〈日常世界／異世界Ⅰ〉と〈異世界Ⅰ／異世界Ⅱ〉という、世界対間の位相差を反映していない。そこで、二つの世界間の位相差とは別に、二つの世界対間の位相差を表現するた

図2

AW ⟶ D

A（nother）W（orld）　…異世界Ⅰ
D（ream）　…異世界Ⅱ

図3

W ⇄ AW ⇄ D

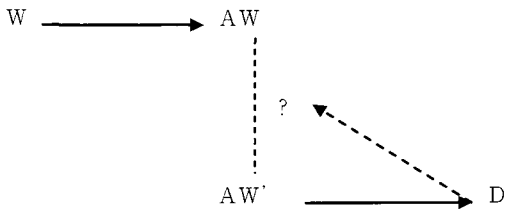
W（orld）　…日常世界
A（nother）W（orld）　…異世界Ⅰ
D（ream）　…異世界Ⅱ

め、図3を次のように修整する（図3.1）。三つの世界を同一の位相に並べないのは、日常世界と夢の世界とが本来的に関係しえず、没関係であることを考慮する必要があるからである。ここでいう三界構造とは、二重の世界対構造なのである。

この位相差の問題によって浮かび上がってくるのは、「異世界Ⅰの同一性不全」とでも呼ぶべき状態である。日常世界から見れば異世界Ⅰは異界だが、異世界Ⅱからみれば異世界Ⅰは「日常世界」である。二重の世界対において異世界Ⅰは両義的に規定され、その二重性格は「異世界Ⅰの日常性／非日常性の反転」として登場人物達に作用する。

まずは主人公の奉行である。ほんらい、彼にとって隠れ里は異質であり、謎に満ちた世界である。だが彼は「異界Ⅰ」に到着してすぐ「異世界Ⅱ」というもう一つの異界に到達してしまった。結果、奉行は異世界Ⅰ（隠れ里）の存在を横滑りさせて受け入れてしまう。異世界Ⅱで怪異を体験したがために、あたかも異世界Ⅰが彼にとっての健全な日常世界であるかのように位置づけられてしまうのだ。

図3.1



W（orld）　…日常世界
A（nother）W（orld）　…異世界Ⅰ
A（nother）W（orld）'　…異世界Ⅰ'
D（ream）　…異世界Ⅱ

女商人の依頼に対して、彼は「何をかしるべに。申あぐべきたよりもなし」（傍点論者）と物的証拠を求める。隠れ里の「部外者」であるはずの奉行が、「あなた方の主張は異様だから、証拠でもなければこの真っ当な世界では通用しない」といっているのだ。彼は異世界Ⅰ（隠れ里）の住人のような態度で振る舞う。夢からの覚醒後、奉行にとっての異世界Ⅰの非日常性が反転するのである。

もう一方は、隠れ里の住人たちである。隠れ里の住人（里人）にとって、この話は「異界からやってきた人間が死者と交信し、彼女らの怨念＝真実を伝える」物語である。住人たちが気付かぬうちに「二またの玉柳」が生長し、人々に動揺が走る。そこへ異界の人間が現れ、柳の下に隠蔽された死体の存在を言いあててしまう。

このとき隠れ里の住人は、異界体験をした奉行以上に奇妙な出来事を体験したのではないか。奉行はたかだか異界で怪異を体験したに過ぎないが、彼らは自分達の住まう世界において怪異を目の当たりにしたのだから。隠れ里にもそれ独自の日常性というものがあったはずだが、それが反転し、隠れ里は非日常化される。（奉行＝日常世界の住人に寄り添った）語りの構造上物語られないこの出来事こそが「夢路の風車」における最大の怪異だとさえいえるかもしれない。[7]

これら反転の軸となっているのは女商人の姉妹である。奉行は彼女らの亡霊と出会うことで、隠れ里の人々は彼女等の死体と遭遇することでそれぞれ日常／非日常が逆転した。これは女商人が「ありえない」

存在であること、怪異の起点であることを示している。結果的には、女商人の亡霊は自らの死体と一致協力して意／遺志を遂げた。「精神＋肉体＝生者」という組み合わせが普通の人間だが、彼女らは「亡霊＋死体＝生ける死者」という異形の住人として異世界Ⅰに回帰したのである。

亡霊(spirit=ghost)＋死体(body)＝生ける死者(living dead)…女商人
精神(spirit=mind)＋肉体(body)＝生者(living man)…隠れ里の住人

「生ける死者」が異世界Ⅰに回帰したことの余波として、日常世界にも「ありえない存在」がもたらされる。「御ほうび」として国王より授与された「嶋絹」[8]である。

嶋絹は異国の物産である。が、それは「物珍しい」を超えて「ありえない」というべきなのだ。そのことは「嶋絹」の表象対象を考えてみると明らかになる。[9]（物語内での）事実として、嶋絹が異世界Ⅰ（隠れ里）の特産品であるのは間違いない。だが、同時にそれは異世界Ⅱ（夢）の剰余でもある。嶋絹はあくまでも「嶋絹という財産のせいで悪漢に狙われ、そのために命を落とした女性の無念を晴らした」ことに対する褒美である。たとえばもし仮に奉行が「ただ単に異世界Ⅰ（隠れ里）に迷い込み、帰還した」だけだったとすれば、嶋絹が日常世界（飛騨）に持ち込まれることはなかっただろうから。

その意味で、嶋絹は女商人の（晴らされた）怨念＝亡霊と等価なのだ。等価交換された「嶋絹」という形で、女商人の怨念は日常世界において表象されてしまう。それも、嶋絹の存在が怨念の不在（解消）に対応するという、在／不在が反転した形で。

それゆえ、嶋絹は「異世界Ⅰ（隠れ里）における物産の豊かさを日常世界に表象する」特産品ではない。「日常世界、異世界Ⅰ、異世界Ⅱ」という物語空間の三界構造を考慮するなら、それは「異世界Ⅱ（夢）が異世界Ⅰ（隠れ里）の異界としてかつて存在していたが、今はもう解消されていることを、つまり女商人の無念が晴らされたことを日常世界に表象する」ものである。

日常世界と異世界Ⅱが同一位相にない以上、そのような表象関係は原理的に成立不可能のはずである。しかも、嶋絹は（異界という）表象対象の不在を条件として（日常世界に）到来する。つまり嶋絹は二重に「表象対象が存在しない＝無を表象する記号」なのだ。隠れ里に夢（女商人）が憑依したように、それは飛騨の日常世界に取り憑く。

$$\frac{-(\text{女商人の怨念})}{\text{異世界Ⅰ}} = \frac{\text{嶋絹}}{\text{日常世界}}$$

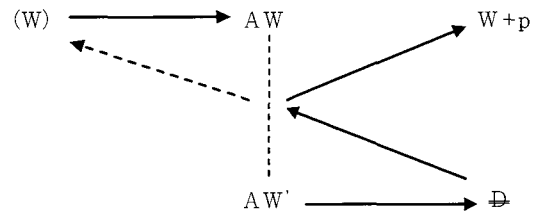
だから「嶋絹」という表象は妥当にも誤読される。報告を受けた飛騨の「当局」は隠れ里の捜索に躍起になった。もし奉行が何も持たずに帰ってきたら、報告は妄想や白昼夢として無視されたかもしれない。飛騨の人々は、誤って嶋絹を「物産豊富な秘境」の記号とみなしたのである。

だが隠れ里の探索は失敗に終わる。彼ら自身は「外部」を捜索して

いるつもりでも、実際は「（不在の）外部の外部」を捜索していることになってしまうからだ。いや、捜索隊は隠れ里を発見し得ないことによって、それを発見したのだ。何故なら、もし「外部の外部」という空虚な対象が存在するとすれば、それはまさしく内部そのもの、この世界以外にないからだ。「ここではないどこか、ではない場所」とは、まさしく「ここ」の事である。

異世界Ⅰだけでなく、日常世界もまた異化される。嶋絹という「由来なき過剰」に取り憑かれた、それ自体が異界となる。奉行が日常世界に帰還し、元の平穏な日常に復帰したと安易に考えることはできない。確かに奉行は飛騨に戻り、そこには隠れ里に迷い込む以前と変わらぬ世界がある。しかし、「嶋絹を携えての帰還」という当の出来事が、世界をほんのわずかに、だが決定的に変えてしまう。それゆえ図式は次のように完成される。

図4



W（orld）　…日常世界
A（nother）W（orld）　…異世界Ⅰ
A（nother）W（orld）'　…異世界Ⅰ'
D（ream）　…異世界Ⅱ
p（rize）　…嶋絹

なお、物語の流れ（物語のシークェンス[10]とそれに伴う物語空間の変容）をチャート化すると以下のようになるだろう。

「隠れ里伝説」の開示・予告↓　山人の発見↓　岩穴の通行（1　異世界Ⅰへの超越）↓　睡眠（2　異世界Ⅱへの超越）↓　奉行と女商人との交信↓覚醒（3　異世界Ⅰへの回帰）↓　怪異の発生（異世界Ⅰの同一性不全）↓　事件の解決↓　嶋絹の獲得（異世界Ⅱの解消）↓「風車」への搭乗（4　日常世界への回帰）↓嶋絹の到来・当局への報告（日常世界の異化）↓隠れ里捜索の失敗（物語空間の収束）↓（抹消される物語）↓「隠れ里伝説」の開示

3

奉行の活躍によって、「女商人の怨念」が解消された。もはや世界間の超越は発動しえなくなる。異世界Ⅰとの交通可能性は断たれるのである。隠れ里捜索は失敗に終わり、奉行でさえ再び隠れ里に到達することは不可能となったことが、そのことを示している。

このとき、「絶対に到達できない異界が存在する」と主張することはできない。むしろ、「異界はない」といわねばならない。絶対に到達不可能な場所、そのような場所がもしあるとすれば、それはつまるところ「ない」のだ。ただ「あるものはある」としか、「この世界がある」としかいい得ないのである。[11]

物語空間は収束する。単一の、そして唯一の日常世界が存在するだけの初期状態への再帰、それも過剰を抱え込んでしまった再帰である。それゆえ、物語の最終局面に対応するように物語構造の図式化を完遂するなら、図は最終的に以下のようになる。（図4.1）[12]

「嶋絹」は、いかなる意味においても表象ではない。もとより嶋絹は「世界の外部からもたらされ、外部（の不在）を表象する異物」ではなく、単に「世界内の一要素に過ぎないが、正体不明の謎の物体」にすぎなかったことになる。「無の表象」ではなく、「無そのもの」としての「嶋絹」である。[13]

図4.1

W

(W=W+p)

W (orld)…日常世界

p (rize)…嶋絹

ここで、読者は奇妙なパラドックスに見舞われる。確かに我々は奉行の異界体験を味読したはずだった。だが結論から言えば、飛騨での報告において彼は自身の妄想ないし夢物語を語ったにすぎない。隠れ里が（再）発見できない以上、嶋絹は隠れ里の証拠としては機能せず、単に「奉行のおかしな発言と奇妙に一致する謎の布」にしかならない。残されたのは、「奉行が語る奇妙な言説」と「由来なき布」だけである。

我々は「はじめ単一の世界があり、それが二度の世界間越境によって世界対、三界（二重世界対）構造へと段階的に拡張され、最終的には再び単一の世界に収束する」という一連の経過を理解できる。だが、「物語空間の収束」が意味するのは、そのような経過があったという過去もろともに世界が解消される、ということなのである。世界の消滅は、空間だけでなく時間の消失も伴う。[14]

物語の結末に対応する図4.1は、本文の冒頭「世にはめいよなる事あり。飛騨の国の奥山に、むかしより隠れ里のありしを、所の人もしらず」という箇所が更新されることを意味している。「秘密の隠れ里が暴露される予告」として機能した冒頭部分は、その結末によって「真偽の定かでない隠れ里伝説」に書き／読み換えられねばならない。「夢路の風車」という物語は、その物語りにおいて再帰的に自己を抹消する。[15]

おそらく、奉行の体験は現実でも虚構でもない。それは、物語として実在している。我々は物語りの地平において、その実在をかいま見るのである。

註1）森耕一「異界の夢」『西鶴が語る江戸のミステリー』2004.4

（2）文学史的観点からみて、この話はその首尾を陶淵明『桃花源記』に拠り、中核部分は『太平広記』「蘇娥」に拠るとされている。また、二人の姉妹という類型は謡曲「松風」をふまえているという。つまり原話の受容と再生産によってこの語は創作されている。しかし、筆者は本論においてあくまでもテクストを自律した存在とみなし、そこに内在

する視点から構造の分析を試みている。それゆえ、こうした文学史的側面にはあまり深く踏み込むことができない。これはテクスト論の理論的課題でもあるが、この点に関しては後日別の角度からのアプローチを試みたい。

（3）近世期作品、とりわけ西鶴作品の構造分析を行った先行研究としては、『好色一代男』の構造を分析した中嶋隆氏の論考（「『好色一代男』の「はなし」」『西鶴と元禄文芸』若草書房　2003.4）がある。

（4）女商人は二人の姉妹である。だが、平林香織氏の論考（「抜脱としての「女はらから」」『日本文学』2005.9）に拠るなら、彼女らは状況に応じて一体化したり分化したりする「女はらから」の系譜に属するという。それゆえ、本論においては彼女らを一個の人格とみなし、特に区別せずに扱うことにする。

（5）普通に考えれば、「夢」は二者が交信するための「メディア」や「チャンネル」にすぎない。それを一つの独立した「世界」とみなすことは許されるのか。ここで思いだされるべきは、『荘子』「斉物論篇第二」の「胡蝶の夢」であろう。「…不知、周之夢為胡蝶与、胡蝶之夢為周与…」と、「現実と夢」は全く同等の資格において対置されている。それどころか、いずれにせよそれらが「夢」にすぎないと解釈されているのである。

（6）「物語空間」という造語は、分析哲学系の分野で用いられる「論理空間」という概念に由来する。例えば、ウィトゲンシュタインは「世界の現実を記述する命題の全てからなる集合」に加え、「現実を記述してはいないが、事態の記述として可能であるような命題の集合」も含むような全体系を「論理空間」と術語した。論理空間は明らかに現実世界を包摂する上位概念である。詳しくはルートヴィヒ・ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』（野矢茂樹訳　岩波書店　2003.8）を参照。

（7）この物語における「語り手」の機能について論じた先行研究には、篠原進氏の「マルチストーリーとしての浮世草子」（『「物語」の構造と変換の研究』1997.3）がある。氏によれば、「夢路の風車」は三人称の文体を採りながらも、時として奉行の一人称文体で語られるという「人称の転換」を引き起こすという。だが、その転換が「隠れ里の住人」の視点を一人称化することはあり得ない。そのような転換は、「飛騨」と「隠れ里」の根本的関係を反転させてしまうからである。

（8）井上敏幸氏は、『新日本古典文学大系76　好色二代男　西鶴諸国ばなし　本朝二十不幸』（岩波書店　1991.10）の脚注で「嶋絹」を「最上品である飛騨の紬嶋、飛騨嶋を意識した設定」としている。一方、宗政五十緒氏は『日本古典文学全集39　井原西鶴集（2）』（小学館　1973.1）の頭注で「島オリ物ハ外国の島ヨリ出ダスヲ云フ」という『貞丈雑記』の記事を引用した上で、「隠れ里が異国である様を示している」としている。ここは宗政氏の見解に従うべきであろう。

（9）「嶋絹」の表象対象を考えるということは、それを「シニフィアン」とみなす、ということである。シニフィアンの概念についてはジャック・ラカン「盗まれた手紙についてのセミネール」『エクリ1』（宮本忠雄　ほか訳　弘文堂　1972.5）を参照。

（10）ロラン・バルトの定義では、「シークェンス」とは「互いに連帯性の関係によって結ばれた核の論理的連続」である。いわば、物語を構成する単位としての出来事の連なりである。「物語の構造分析序説」（『物語の構造分析』花輪光　訳　みすず書房　1979.11）などを参照。

（11）このはなしに関する限り、我々は『西鶴諸国はなし』序文の結び「世の中にない物はなし」という箇所に存在論的含意を見いだしうる。つまり、それは「世の中にはなんでもある」の意であると同時に「世の中にはあるものだけがある」でもある。

（12）これに初等算術的なメタファーを与えるとすれば、$\boxed{Wn=\frac{2}{1}n(2W+(n-1)p)\ (n\text{は自然数})}$ となるだろう。つまり「初項W、公差pの等差数列」である。Wの内部において由来不明のpが無限に増大し、Wの安定した自己同一性を乱し続けるというイメージである。

（13）ここで「嶋絹」は「もの（das Ding）」としてある。フロイトに由来し、ラカンによって見いだされたこの対象は、いわば「言葉で修飾できるようないかなる性質も持たない、意味も持たず、名もなく、外部もなく、内部もない何か」である。詳しくは「〝もの〟の導入」（ジャック・

ラカン『精神分析の倫理（上）』ジャック・アラン・ミレール編　小出浩之　ほか訳　岩波書店　2002.6）などを参照。

(14) カントによれば、「世界」という理念については「時間・空間において有限である」、「時間・空間において無限である」という矛盾した二つの定立が導かれてしまう。これは、理性が経験の対象の限界を超えて拡張されたために空転してしまうためである。カントにとって時間と空間は「直観の形式」であり、実在の対象ではない。

彼の見解に従うなら、世界を実体的に捉えた上で、その拡張（生成）・収束（消滅）を考えざるを得ない「夢路の風車」という物語も同様のアンチノミーに陥っている。対象化された「世界」は「超越論的仮象」なのである（イマニュエル・カント『純粋理性批判』（有福孝岳　岩波書店　2001.7）の「I超越論的原理論　第二部門超越論的論理学　第二篇純粋理性の弁証論的推論について　第二章純粋理性の二律背反」などを参照のこと）。論理的には、「世界」や「外部」について語る言説は無意味である。だが、我々が「夢路の風車」という物語をたしかに享受しているのもまた事実である。

(15) これを直観的に馴染み易いように言いかえるなら、「奉行の体験は全て夢である」という主張に近似するだろう。例えば、森田雅也氏は「…つまり隠れ里の話すべてが「夢」と考えられるのである。」（「『西鶴諸国はなし』試論（上）―「人はばけもの」論―」日本文芸研究　1992.12）としている。だが、私が主張しているのは「全て夢である」ということではなく、「全てが厳然たる事実であるにもかかわらず、夢でしかありえない」ということなのだ。